

「仙台スポーツ見聞録 - スポーツ現状の断片から考える - 」

鈴木 厚史

今回の連続講義は私たちの足元にありながら、普段何気なく見落としている（スポーツの）部分に焦点をあてて考えることがそのスタートとなった。初日から東北大学構内・仙台市内のスポーツ施設3か所と地域のスポーツを支える立場（いわば縁の下の力持ち的存在）にいる人たち3人を訪ねて話を聞くことができた。それぞれに共通して感じたものを一般化して表現することは非常に困難だと思うが、あえて言うのなら、「独善的」ということになると思う。良い意味で考えれば、それぞれの裁量で機能しているとも取ることができるが、その実際は異なるようだ。

東北大学構内はともかくとするが、県スポーツセンター（以下、センターとする）片平市民センター（市民センターながら体育館を併設）ともに説明をそのまま聞く分には利用者もあり、予定も埋まっているという。申し分のない運営をしているようだが、県スポーツセンター（以下センター）の場合、その実は利用者が固定化しているといったほうが適切なのではないだろうか。これは一般の利用者が多いにもかかわらず、センターが独自の事業を主催しても人が集まらないということに裏づけされると思う。短絡的に「経営努力がなっていない」と抽象的な批判をすることは簡単だが、問題の核心はそこではない。スポーツをする場を提供するセンター側（宮城県スポーツ振興財団）と実際にスポーツをする利用者（仙台市民、ひいては宮城県民）とのニーズが合致していないところにあるのではないだろうか。センター側、利用者の双方に話を聞いていないので推測の域を出ないが、利用者が固定化し、センターの主催事業に人が集まらないというのはおそらくはセンター側が利用者のニーズがわからず、なにをどうしたらいいかわからない状態にありながら、それでもスポーツの場を提供しようと試行錯誤を繰り返してもがいているように見えた。

同様のことは仙台市スポーツ企画課、仙台市青葉区まちづくり推進課の両方でも感じた。特にスポーツ企画課では仙台市が独自に作成した「せんだいスポーツ元気プラン」中でも仙台市の総合型地域スポーツクラブ（以下総合型）を中心として話を聞くことができた。一昨年の国体、昨年のW杯とメガ・スポーツイベントを開催した後のスポーツ振興を目的として作成されたものだが、これをもてあましていた印象をうけた。つまり、仙台市としては総合型を作りたいのだけれど、それはあくまでも（できれば）市民主導という形で作りたい、その支援はする（将来的には市民の自主運営にしたい）という姿勢なのに対し、市民の総合型に対する意識は現行の体育協会などの活動と区別できない、しにくい部分が多いようだ。それを仙台市はわかっているが、今後どうするかという段階で手をこまねているのが今の姿であろう。りっぱな受け皿はできたが、その中に何をどう入れていくのか、という方針すらはっきりしていないようだった。確かに大都市ゆえに市民との距離が開いてしまうということも否定できない。しかしその距離が問題なのではなく、その距離を詰めようとしないうちにこそ、問題の本質があるのではないだろうか（仙台市は市民との対話によって情報交換をしたいようだ）。

こうしたことから「独善的」という言葉でくくってみたのだが、「スポーツ」という共通語を媒介としながら、お互いの意図（宮城県 - 仙台市、仙台市 - 青葉区、仙台市 - 市民、スポーツ施設 - 利用者）を汲み取れない、汲み取ろうとしない姿勢が感じられた。これは（相対的にみて）大きいもの（市に対しての県、区にたしての市、以下同じ）にだけ原因

(責任)があるのではない。提供される側(最終的には当事者である私たち自身)にもその一端はある(極論を言えば、行政から施設・団体の運営・管理を任されてもそれを継続してやっていけるだけの物心両面のパワーを持つこと)。しかし、市民はいわゆるこうしたスポーツ政策に関して行政の側から示される資料以外の情報を仕入れることは難しい(今でこそ様々な取り組みがなされるようになったが)。そこで行政を頼ることが多くなる(行政もそれを望んでいる節がある)が、これは講義の中で触れられたように集権化と分権化のくりかえしということになる。

お互いが「つかず離れずの距離」を確立し、その距離を維持していくことが現代社会の中にスポーツが新たな局面を切り開いていくきっかけとなりえるかもしれない。